

みやげものと観光経験

「ものがたり」の視点から

橋本和也(京都文教大学人間学部)

近年、みやげものや観光ガイドに関する研究がはじまっているが、現場の報告はあっても考察に関してはこれからというのが現状である。本発表では、観光者が紡ぎ出す観光経験の「ものがたり」とみやげものに注目する。そのものがたりの形成には、観光の場におけるあらゆる経験とあらゆる種類のガイドがかかわっている。みやげものについては、観光地を「換喩的凍結化」といわれるが、はたして現地を翻訳するだけの品物、不完全な等価物、「ご当地キティ」のようにキャラクター化するだけのものであろうか。「みやげもの」が観光地における観光経験の「ものがたり」を再構築するプロセスに注目すると、みやげものに凍結化された観光地のステレオタイプ化されたイメージを「ものがたり」がいかにか「解凍」し、観光者の観光経験を思い出深いものとして呼び起こすかが明らかになる。ものがたりが観光の現場においてどのように構築され、みやげものが意味ある存在に仕上げられていくかを本発表で考察してみようと思う。

観光みやげ研究ははじまったばかりである。N.グレイバーンによる巡礼における「聖杯」との比較、ゴードンのみやげものの4分類、リットレルによるアメリカ合衆国のアイオワ州をはじめとする近隣3州の観光者へのインタビュー調査、そして日本では宮下雅年の「ご当地キティ」の研究などがあげられる。

発表で詳しく取り上げるが、リットレルのグループは、観光者は自分たちなりの「真正性」をみやげものに求めているという興味深い結果を報告している。とくに工芸品を求める観光者は、店主や製造者との交流、とくに製造行程を観察する機会を得た場合にはその「みやげもの」を購入し、その品物を「真正」だと思ふ傾向が強いという。そして帰宅後は自宅のしかるべき所に飾り、来客の機会があるごとにその品物購入時の「ものがたり」を観光経験とともに語るといふ。すなわち「みやげもの」にどれだけのものがたりを付与できるか、いかなるものがたりをその事物が語るかが、観光者にとっての「真正性」の重要な基準になることを示している。もちろん購入者本人の好みのコレクションの一部になること、製作者が有名であることも重要な基準である。若い観光者にはその場で目を惹くものが良いものだといって購入する場合も多いが、すぐにガレージセールに出されるとの指摘もある。観光者にとって思い出深いものがたりが付与されるならば、岩の欠けらも「真正なるみやげもの」となるのである。

みやげものを地域文化の単なる「換喩的凍結」であると指摘する研究があるが、それだけではなにも解明されない。みやげものと地域文化は、その地を離れるとともに隠喩的關係に切り離されるが、それを換喩的關係に再構築する仕掛けが「語り」である。語られる内容は客体化された地域文化ではなく、観光の場における観光者の経験に関する「ものがたり」である。それは凍結された地域文化の単なる「解凍」作業ではない。「ものがたり」は語る時点の話者を「語る」。みやげものが喚起する観光経験の「ものがたり」は、語られるたびに再編成・再構築されるのである。「みやげもの」の語りも地域文化の「真正なる」表象物かどうかを吟味するものではなく、観光者にとっての「真正なる」観光経験を語るものである。その意味で問われるべきは、なにが観光者にとっての「真正なる観光体験」を構成しているかである。

【みやげもの、観光経験、ものがたり、換喩的凍結化】